

報道関係者各位

2026年6月10日
スターサージカル株式会社

【スポーツをする 20～40 代の近視の方への意識調査を実施】 世界的なサッカー大会を前に、スポーツ時の“見え方”に注目：

スポーツをする人の約 3 人に 2 人が、プレー中に見え方の支障を経験 - 43.7%が、日常生活よりもスポーツ時のほうが見えにくさ・支障を感じやすいと回答 - 視力矯正の選択肢として ICL にも関心

眼鏡やコンタクトレンズに次ぐ、視力矯正法の新たな選択肢として注目される ICL（Implantable Contact Lens：有水晶体眼内レンズ）の製造販売を行うスターサージカル株式会社（本社：東京都港区西新橋一丁目1番1号、代表取締役：中田博之）は、世界的なサッカー大会の開幕を前に、「スポーツと視力・見え方」に着目し、20～40代で近視や視力矯正経験があり、日常的にスポーツ・運動を行っている人を対象とした意識調査を実施しました。

近視人口は世界的に増加傾向にあり、2050年には世界人口の約2人に1人が近視になると予測されています¹。近視には様々な視力矯正方法がありますが、スポーツ時の見え方の違いについてはこれまで明らかになっていません。そこで本調査では、スポーツ時に感じる見え方の支障や、現在の視力矯正方法に対する課題およびニーズについて調査を行いました。

その結果、多くの方がスポーツ時に見え方の支障を経験していることが明らかになりました。また眼鏡やコンタクトレンズを使わずに視力を維持できる ICL についても、安定した視力が得られる視力矯正方法として、関心が示されました。

【主な調査結果】

- スポーツをする人の 63.7%が、スポーツ時に「見え方に支障を感じたことがある」と回答
- 43.7%が、日常生活よりもスポーツ時のほうが見えにくさ・支障を感じやすいと回答
- 眼鏡使用者ではスポーツ時に「ズれる」「曇る」といった不満が見られ、コンタクトレンズ使用者では「乾燥する」などの不満も挙げられた
- スポーツ時に困ることとして、「距離感がつかみにくい」（49.0%）、「ボールや相手が見えづらい」（40.8%）が上位
- 「スポーツ時に、より安定した視界が得られる視力矯正方法があれば関心がある」と回答した人は 42.2%
- 「スポーツ時に、より安定した視界が得られる視力矯正の選択肢として ICL に関心がある」と回答した人は 37.2%

【監修医のコメント】

山王病院アイセンター センター長、国際医療福祉大学 教授

清水 公也先生

スポーツでパフォーマンスを発揮するには、安定した視界が重要です。特に球技やコンタクトスポーツでは、瞬時の判断や距離感、周囲の認識などがプレーに大きく関わります。一方で、コンタクトレンズの乾燥やズレ、眼鏡による視野制限など、スポーツ時特有の課題を感じている方も少なくありません。本調査では、日常生活では問題がない人でも、スポーツ時には見えにくさを感じている実態が示されました。近年では、スポーツをきっかけに、眼鏡やコンタクトレンズに加え、ICLのような視力矯正方法について相談されるケースもあります。自身のライフスタイルやスポーツ習慣に合わせて、適切な選択肢を知ることが重要です。



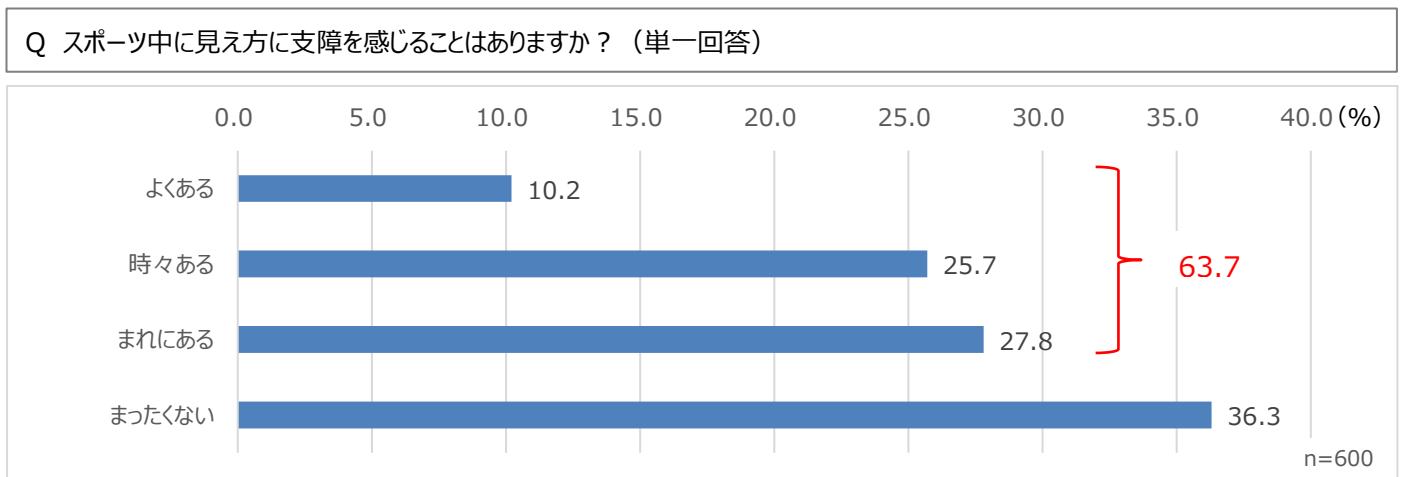
調査概要

- ・調査名：スポーツ時の見え方・視界に関する意識調査
- ・調査対象：全国の20～40代男女のうち、視力（両眼平均）が1.0未満、かつ月1回以上スポーツ・運動をしている人
※白内障、緑内障、網膜疾患など近視以外の眼疾患がある人は除外
- ・有効回答数：600名（20代～40代、各年代200名）
- ・調査方法：インターネットリサーチ
- ・調査期間：2026年5月22日（金）～24日（日）

主な調査結果

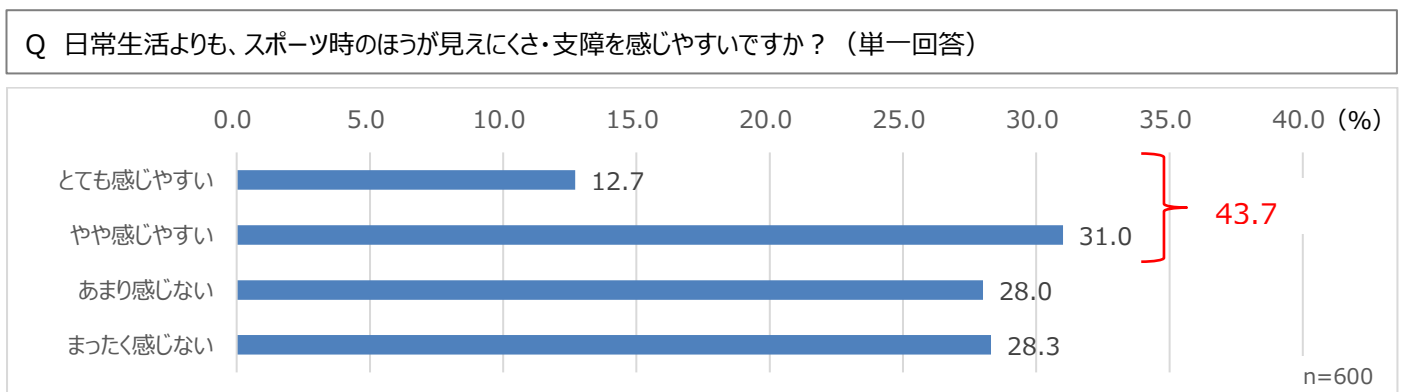
■スポーツをする人の63.7%（約3人に2人）が、スポーツ時に「見え方に支障を感じたことがある」と回答

スポーツ中に「見え方に支障を感じることがある」と回答した人は63.7%となりました。また、「よくある」「時々ある」と回答した人も35.9%にのぼり、スポーツをする人の多くがプレー中の見え方に課題を感じている実態が明らかになりました。



■43.7%が、日常生活よりもスポーツ時のほうが見えにくさ・支障を感じやすいと回答

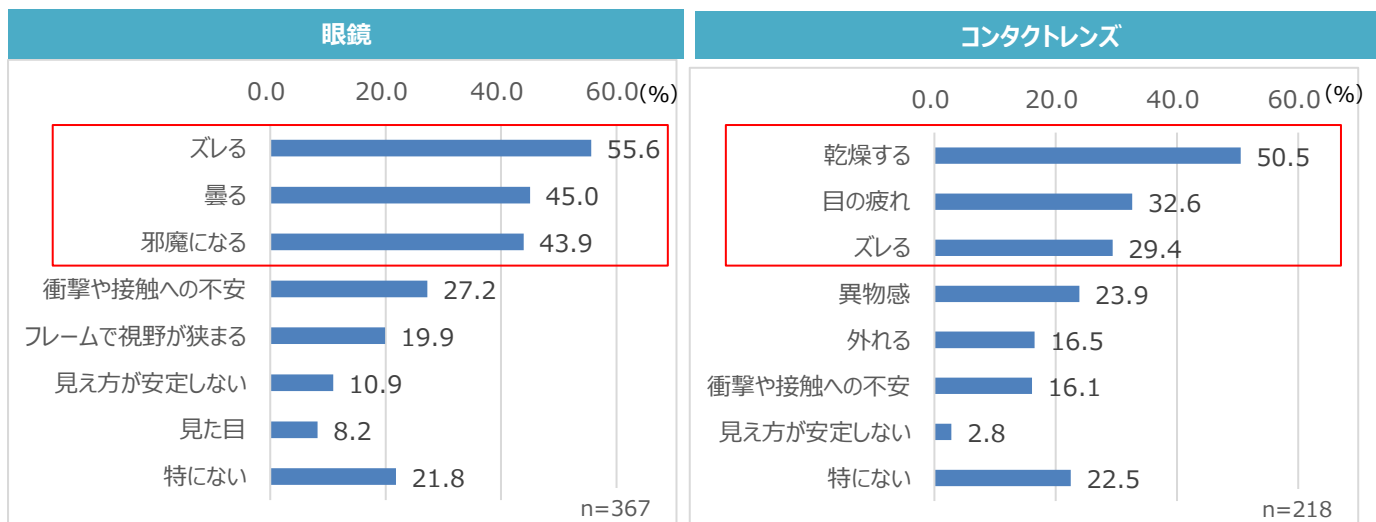
「日常生活よりも、スポーツ時の方が見えにくさや支障を感じやすい」と回答した人は43.7%でした。スポーツでは、日常生活とは異なる視覚的負荷がかかることから、普段は問題を感じていない人でも見え方に課題を感じるケースがあることがうかがえます。



■スポーツ時の支障は、眼鏡では「ズれる」「曇る」、コンタクトでは「乾燥」「目の疲れ」が上位

スポーツ時に眼鏡を使用している人では、「ズれる」「曇る」「邪魔になる」が上位となりました。一方、コンタクトレンズ使用者では、「乾燥する」「目の疲れ」「ズれる」などの不満が見られました。眼鏡とコンタクトレンズでは課題の内容は異なるものの、いずれもスポーツ時には日常生活とは異なる不便さを感じていることが分かりました。

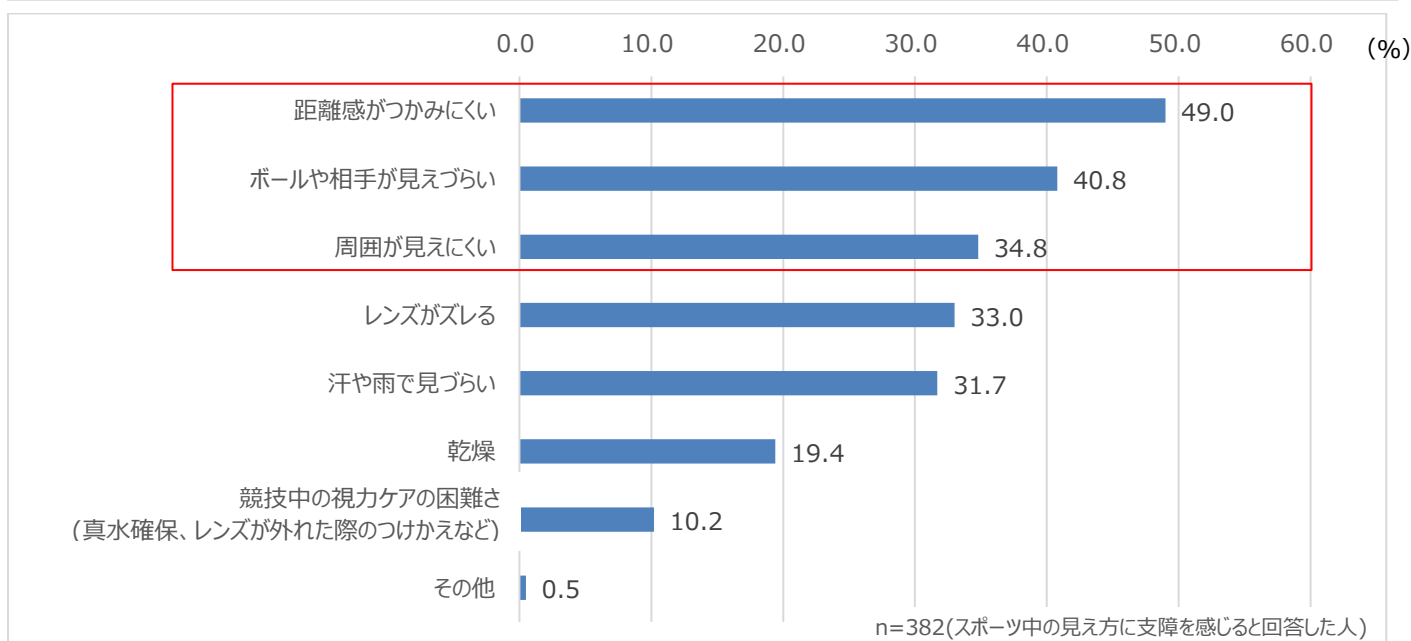
Q スポーツ時に【視力矯正方法】で気になることはありますか？（複数回答）



■スポーツ時に困ることは、「距離感がつかみにくい」（49.0%）、「ボールや相手が見えづらい」（40.8%）が上位

スポーツ時に感じる具体的な困りごととしては、「距離感がつかみにくい」（49.0%）が最も多く、次いで「ボールや相手が見えづらい」（40.8%）、「周囲が見えにくい」（34.8%）となりました。見えにくさは単なる視力の問題にとどまらず、プレー中の判断や周囲の状況把握にも影響を与えていることが示唆されました。競技別にみると、球技（n=105）では「ボールや相手が見えづらい」（41.0%）、コンタクトスポーツ・武道（n=23）では「周囲が見えにくい」「汗や雨で見えづらい」（ともに43.5%）、水泳・マリンスポーツ（n=63）では「汗や雨で見えづらい」「レンズがズれる」（ともに31.7%）が上位となり、競技特性に応じて異なる見え方の課題がみられました。

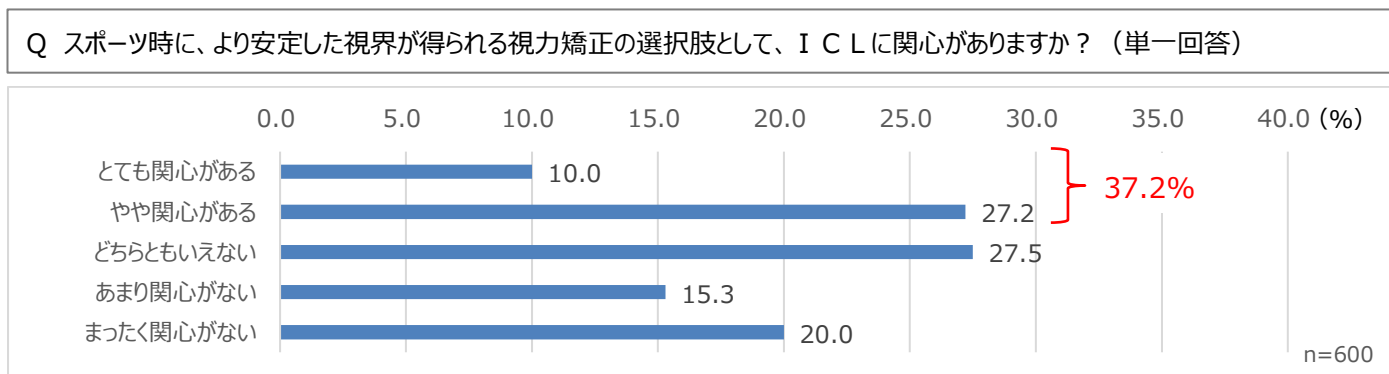
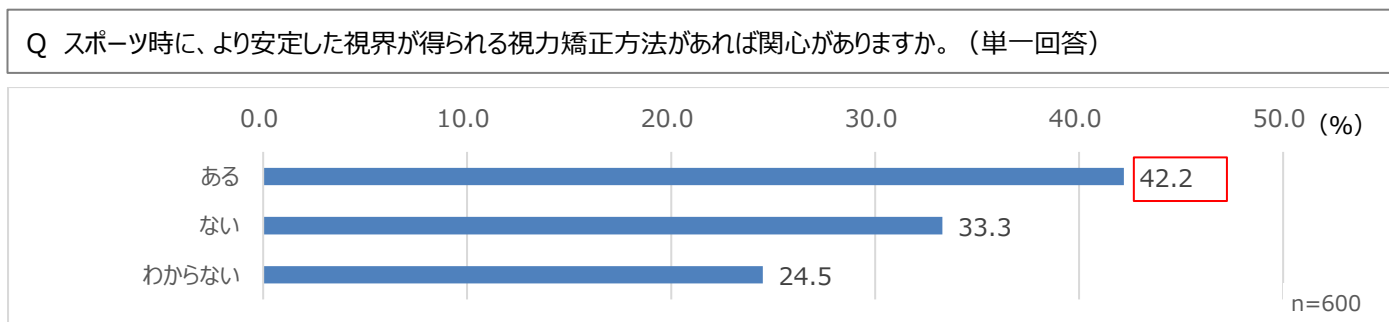
Q どのような場面で見えにくさや不便さを感じますか？（複数回答）



■スポーツ時の見え方に課題を感じる人ほど、ICL への関心が高い傾向

スポーツ時に見え方の支障を感じる人が多い一方で、「スポーツ時に、より安定した視界が得られる視力矯正方法があれば関心がある」と回答した人は 42.2%でした。また、「スポーツ時に、より安定した視界が得られる視力矯正の選択肢として ICL に関心がある」と回答した人は 37.2%となりました。

クロス集計では、ICL に「とても関心がある」と回答した人の 76.6%が、スポーツ時に見え方の支障を感じた経験があることが分かり、スポーツ時の見え方に課題を感じる人にとって、眼鏡やコンタクトレンズに加え、新たな視力矯正の選択肢への関心が高まっていることがうかがえます。

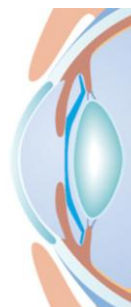


眼内コンタクトレンズ（ICL）治療について

眼内コンタクトレンズ（ICL）治療とは、角膜を削らずにレンズを目の中に入れて視力を矯正する治療法です。インプラントブルコンタクトレンズ（Implantable Contact Lens）を略して ICL と呼んだり、フェイク IOL、有水晶体眼内レンズ、眼内コンタクトレンズと呼ばれることがあります。

ICL 治療は、現在世界 85 か国以上で 400 万枚を超える販売実績があります。また、必要に応じてレンズを取り出せるので、手術前の状態に戻すことが可能です。

眼内コンタクトレンズ（ICL）について：<https://kinshichiryo-icl.jp/>



スターサージカル株式会社について

私たちスターサージカル株式会社は、1988 年に創設以来、独自の技術により、日本国内における眼内レンズの世界を切り拓いてまいりました。その後、2008 年に米国 STAAR Surgical 社が 100% 出資する“開発・製造・販売”の日本の拠点として、グローバル企業に生まれ変わりました。私たちは、スターグループの一員として、製品の開発・製造・販売を通して眼科医療の進展に、貢献したいと考えております。私たちがご提供する近視や乱視を矯正する ICL 治療は、現在、世界 85 か国以上で 400 万

枚を超える販売実績があり、世界中の皆さまに QOV “Quality Of Vision”をお届けしています。

現在、日本で屈折矯正手術を受ける患者様は、年間で数万眼といわれています。日本でも、ICL 治療が、眼科専門医の先生方、患者のみなさま方に屈折矯正の“First Choice”になるよう、その普及に努めると共に、さらなる新製品の開発、品質向上に努めて参る所存です。

本調査に関するお問い合わせ先：

スターサージカル株式会社 メディアセミナー運営事務局（コスモ・ピーアール内）

担当：下川、浅野、松本

メール：staarsurgical@cosmopr.co.jp

電話：070-1398-8824（下川）

JP-EVO ICL-26-0025